The Japan Society of Educational Sociology

学校的社会化の諸相（5）

—＜教室秩序維持の方法としての「視線管理」＞と＜外国人児童にとっての学校経験＞に着目して—

北澤　毅（立教大学）　有本真紀（立教大学）
間山広朗（神奈川大学）　○山田鋭生（立教大学大学院）
○保坂克洋（立教大学大学院）

Ⅰ．「学校的社会化」研究の蓄積

本共同研究は、これまで「学校的社会化」というキーワードのもとにいくつかの研究成果を蓄積してきている。「学校的社会化」という概念については本共同研究代表者の北澤（2011）、が詳述しているが、端的に言えば「『子ども』が学校空間に特有の規則や規範に習熟し、『児童』になること」であるといえる。

これまで、本共同研究は以下のような問題関心のもとに報告を行ってきている。1．教室において有効な知識や振る舞いをどのように習得しているのか。2．授業場面に特有の＜質問－応答＞や＜挙手－指名＞の形式。3．既にできることを「できていない」ことにする＜白紙化実践＞と、学級として「できた」ことにする＜学級的事実＞の問題。4．教師－児童、児童間の非対称性の問題、などである。このように、本共同研究は「学校的社会化」という概念の構成要素となるような個別具体的な相互行為場面の分析を行ってきており、「学校的社会化」という概念は様々な問題関心に開かれている。

そのような中、本報告もまた、いかなる相互行為のありようが「学校的社会化」の一側面として記述可能であるのかということを報告者二名の共通の問題関心としている。まず、第一報告においては、児童を授業に「引きつける」方法についての分析が行われる。児童をいかに授業に集中させるのかという問いは、授業場面を取り巻く様々な問題関心の中でも根源的なものであり、社会学的記述が行われるべき重要な問題である。そのような問いに応える形で、例えば大辻（2006）は授業場面における教師－児童間の会話分析を行い、会話のタイプを分類したうえで「タイプM」と呼ばれる特有の会話構造を、児童を授業に夢中にさせるものとして抽出している。第一報告はそのような問題関心を共有しつつも、児童を授業に「引きつける」方法としての板書に着目する。そして、第二報告では、外国人児童の学校経験についての分析がなされる。これまでにも、「ニューカマー」と呼ばれる外国人児童についての研究はエスノグラフィックな手法を中心として行われてきたが、第二報告はそのような一連のニューカマー研究では中心的に論じられてこなかったタイプの児童を取り巻く状況を分析の対象としている。

なお、本報告で使用されるデータは、関東地方にある二つの公立小学校でのフィールドワークを通して収集されたものである。観察と同時にビデオ撮影をしつつ、フィールドノーツを作成するという方法で調査を実施した。本報告はそれらのデータを用いて、個別の問題関心に基づいて「学校的社会化」の探究を行うものである。

Ⅱ．授業場面において「児童を引きつける」方法に関する一考察
—板書を用いた視線管理の相互行為分析—

1．問題関心

我々が他者との相互行為に臨む際、例えば日常的な「おしゃべり」などの際には、他者が我々の発話や身体動作に着目しているかどうかということは大きな関心の一つである。我々は、自覚しているかどうかにかかわらず、他者が我々の行為に注意を向けているかどうかということに常に気を配りながら相互行為を行っているのである。その中でも、相互行為の最中に我々が特に気を配っているのは他者の視線がどこに向

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

けられているのかという問題である。コミュニケーションにおいて視線の果たす役割が大きいということは、我々が日常生活者として他者との相互行為場面に直面する際に経験することであるし、そのような日常的な経験の解剖学として社会学は我々の日常生活における視線の管理に着目してきた。

そして、そのような着目は日常的な場面だけに留まらず、医療場面や授業場面などにも及んでいる。そういった中でも、特に授業場面に関しては教師や児童の視線に着目した研究が数多く存在する。その多くは児童を授業に「引きつける」ことへの関心から、心理学を中心的な分析枠組として様々に論じられてきている。

視線に着目して、児童を授業に「引きつける」ことの研究が行われる場合、教師や特定の対象に対しての視線の集中をもって児童が授業内容や教師／他の児童の発話に着目しているという分析がなされる。仮に「視線の集中＝児童による着目」であるとするならば、授業場面において教師はどのような方法で児童による着目を引き出すことを達成しているのか。これが本報告の関心である。

教師が児童による着目を引き出す方法として最初に挙げられるのは、例えば「先生の方を見なさい」であるとか「～を見てください」といったように、直接的に児童が着目すべき対象を教師が指示する方法である。このような方法は多くの授業場面で観察することが可能である。また、発話によって着目すべき対象を指示するのではなく、例えば我々は教室内で次のような場面を目にすることがある。それは、教師に着目すべき時にそうしていない児童に対して教師が視線を向けると、それに気付いた件の児童が慌てて教師の方を見るという場面である。このような方法は、前者の直接的な方法と比較すると、発話を用いていないという点で間接的な方法であるといえるかもしれない。

児童による着目を引き出す方法には、これらの他にも直接的なものから間接的なものまで様々な方法があり得るだろう。そのような中で、本報告が分析対象とするのは、発話を用いつつも直接的には着目すべき対象を指示しない方法であり、その際、板書の使用方法が重要なポイントとなっている。本報告は、第一に板書を用いて児童による着目を引き出す方法を明らかにし、第二に、その方法には1年生と6年生で差異があることを指摘することによって、児童が授業の受け方に習熟するという意味での学校的社会化の一側面を指摘する。

2．事例：「消されるかもしれない板書」

一般的に、授業場面においては、「教師が発話を行っている間は教師の方を注視していなければならない」という規範が存在している（と考えられている）。それは、我々にとって一見自明のことのように思われるし、教師や、教師と相互行為を行う児童を注視していない児童にサンクションがくだされるということ（Macbeth 1990）も報告されている。しかしながら、本報告において収集されたデータにおいてはそれとはやや異なる現象が観察された。例えば授業の冒頭において「前回やったところ」の確認を行う際に、教師は教科書の該当ページと児童を見渡すような形の視線配分を行うが、児童の方は意外にも教師の方をあまり向いていないのである。そして、そのようなことは教師によるサンクションの対象となることもない。「教師が発話を行っている間は教師の方を注視していなければならない」という規範は、学校を取り巻く言説空間の中に存在はしていても、実際にそれがどのように行われているのかということとの間には差異があるように思われるのである。

そのような中においても、1時間の授業の間には教師に着目すべき、そして、おそらくは教師も児童を引きつけたいと考えているであろうポイントが存在するように思われるのである。そのようなとき、教師がとる最もシンプルな方法は「ここは重要なのでしっかりと前を見て聞いていてください」などというように、発話によって児童の着目を引き出す方法である。これは確かに児童を引きつけるうえで有効な方法であり、報告者の授業観察の中でも幾度となく観察された。ただ、当然のことながら教師が児童を引きつけるための方法はそれだけではない。授業場面においてほとんどの場合に用いられる「板書」もその方法の一つなのである。本報告では、教師が児童を引きつける際の方法として、ある特有の板書の使用の仕方に着目する。

通常、板書はノートに書き写すべきであると

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

されており、その書き写し方は小学校入学と同時に少しずつ、しかし入念に教師による指導が行われる。本共同研究の関心に照らし合わせれば、そのような中で、子どもは次第に板書をどのように扱うのかということに習得していき、児童になっていくのである。板書はふつう、まず、書き写すべき文章などを教師が黒板に書いていき、教師が書いている途中、もしくはあるところまで完全に書き終わってから、それを児童が書き写していく。板書は必ず書き写すべきものであり、教師は時折児童のノートを回収して、板書を書き写すことができているかどうかチェックしたりすることがある。

その一方で、板書には書き写さなくても良いものが存在する。教師が一時的に黒板に書き、すぐに消されてしまうような板書の仕方が存在するのである。本報告ではそのような板書を「消されるかもしれない板書」と呼び、それが児童を引きつけるための有効な方法として機能していることを指摘する。そして、1年生と6年生の授業場面を比較することを通して、児童が授業場面を経験していく中で「消されるかもしれない板書」が使用されることに習熟し、「児童」になっていくこと、すなわち学校的社会化が行われていることを示す。

（担当：山田鋭生）

Ⅲ．外国人児童にとっての学校経験

1．問題関心

入国管理法が改正された1990年以降、多くの外国人が日本社会に流入してきたと同時に、日本の公立学校においても多くの外国人児童生徒が在籍するようになってきている。このような状況の中、これまで主に学校文化論の視点からいわゆる「ニューカマー」と呼ばれる外国人児童生徒の学校経験について研究の蓄積がなされている。

例えば、これらの研究では、「一斉共同体主義」（恒吉　1996）といった言葉に代表されるように、日本の学校文化の同化圧力によってニューカマーの子どもが周辺化されてしまう様子（清水　2006）が指摘されている。また、ニューカマーの子どもは一方的に同化圧力を受け受動的に存在しているのではない主体的な行為者であるという観点から、ニューカマーの子どもが行う日本の学校文化に対する「抵抗」戦略が明らかにされている（山ノ内　1999、児島　2006）。

これらの研究は、不平等な社会構造の再生産にたいして教育がどのように寄与しているかということに着目する学校文化論（志水　1990）の視点から明らかにされていると言えよう。ブラジル人生徒が同化圧力の強い日本の学校文化の中で「抵抗」戦略を生み出す過程は、ひとつのニューカマーの学校適応のタイプとして捉えられる。

これまでの外国人児童生徒に関する研究では、いわゆる「ニューカマー」を対象としたものが中心となっていた。しかしながら、平成24年度の日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ状況等に関する調査では、日本語指導が必要な外国人児童生徒のうち英語を母語とする外国人児童生徒は、2%（27,013人中644人）となっている。また、本報告の対象となる児童のように、例えば、母語は英語でなくとも、出身国において公用語として英語が用いられているために英語を話すことができるというように、英語を話すことができる外国人児童生徒も少なからず存在している。

現在、日本社会においてもグローバル化が進展しているなか、グローバルな言語としての英語能力を求める風潮が高まっている。小学校においても2011年度から新学習指導要領の全面実施に伴って外国語活動が5・6年生で必修化される中で、外国語活動としての英語が取り入れられている。また、文部科学省が「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を策定するなど、英語の重要性が強調されている状況の中で、学校において英語を話せる外国人児童の学校適応は、これまでの先行研究が明らかにしてきた「ニューカマー」の子どもとは異なる形態となっているのではないだろうか。つまり、日本語能力の問題を中心とした様々な問題を抱えながら日本の学校に存在することになる英語話者外国人児童は、自らの英語能力を学校生活の中で能力のある者としての自己呈示を行うための資源として用いることによって、無能力化されている自分をクラスに位置づけているのではないだろうか。しかしながら、英語能力に依存したこのような自己呈示は、英語を話せない

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

クラスの他の子どもたちと積極的に関係性を築こうとするものではない。このことが英語話者外国人児童と教師や他の子どもとの関係性を構築するうえでより複雑な状況を引き起こしているのではないだろうか。

そこで本報告では、日本の学校において、英語話者外国人児童は、自らの英語能力をどのように用いながら、教師や他の子どもたちのとの関係を築き、そしてそのことによって、どのような問題を抱えているのかということを明らかにする。

（担当：保坂克洋）

（なお、IIおよびIIIの詳細なデータならびに分析は、当日配布資料をご参照ください。）

【文献】

Goodwin, C., 1981, *Conversational Organization*, Northeastern University Press.

——, 1984, "Notes on story structure and the organization of participation", Atkinson, J. M. and Heritage, J., ed., *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge University Press.

坊農真弓・高梨克也共編・人工知能学会編集, 2009, 『多人数インタラクションの分析手法』オーム社。

Goffman, E., 1974, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Harvard University Press.

Heath, C., 1986, *Body Movement and Speech in Medical Interaction*, Cambridge University Press.

北澤 毅, 2011, 「『学校的社会化』の問題構成—『児童になる』とはどういうことか—」北澤毅編『<教育>を社会学する』学文社

児島明, 2006, 『ニューカマーの子どもと学校文化』剄草書房.

Payne, G. and Hustler, D., 1980, "Teaching the Class the practical management of a cohort", British Journal of Sociology of Education, 1(1), pp. 49-66.

Macbeth, D., 1990, "Classroom Order as Practical Action: the making and un-making of a quiet reproach", *British Journal of Education,* Vol. 11, No. 2, pp. 189-214.

——, 2011, "Understanding understanding as an instructional matter", *Journal of Pragmatics*, Vol. 43, Issue 2, pp. 438-451.

McHoul, A., 1978, "The Organization of Turns at Formal Talk in the Classroom", *Language in Society,* Vol. 7, pp. 183-213.

Mehan, H., 1979, *Learning Lessons: Social Organization in the Classroom*, Harvard University Press.

西阪仰, 1992, 「参与フレームの身体的組織化」『社会学評論』Vol. 43, No. 1, pp. 58-73.

大辻秀樹, 2006, 「Type M：『学ぶことに夢中になる経験の構造』に関する会話分析からのアプローチ」『教育社会学研究』第 78 集,pp.147-168.

志水宏吉, 1999, 「学校文化論のパースペクティブ」長尾彰夫・池田寛編『学校文化—深層へのパースペクティブ』東信堂, 11-42.

清水睦美, 2006, 『ニューカマーの子どもたち』剄草書房.

恒吉僚子, 1996, 「多文化共存時代の日本の学校文化」堀尾輝久・久冨善之他編『学校文化という磁場』柏書房, 215-240.

NII-Electronic Library Service